

白川静のことば

《17》



金子都美絵・画

あらゆるものは生命の連続のなかに生きる。その連続の過程をどれだけ充たしてゆくことができるのか、そこに生きるこの意味があるといえよう。

生とは自然的生である。細胞の活動に支えられるものには、すべて生がある。それで生は、草の生い茂る形で示される。

一つの時期を過ぎて結節点が増えられると、世となる。人の世の横への広がりには姓である。姓とは血縁的集団をいう。

自然的生のなかでは、生きるこの意味は問われていない。その意味を問うものは命めいにほかならない。命ははじめ令とかわれた。礼冠を著けた人が跪ひざまずいて、しづかに神の啓示を受けている。おそらく聖職のものである。その啓示は、神がその人を通じて実現を求めるところの、神意であった。のちには甘をそえるが、その祈りに対して与えられる神意が命である。生きるこの意味は、この命を自覚することによって与えられる。いわゆる天命である。『論語』に「命を知らずんば、以て君子たることなきなり」というのはその意である。当為として与えられたもの、それへの自覚と献身は、その字の形象のうちですでに存するものであった。